

姫路大学大学院看護学研究科

Newsletter No. 9

Graduate School of Himeji University

Master of Nursing Science

Doctor of Philosophy in Nursing Science

C o n t e n t s

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ウィズ・コロナ時代の国際交流の実際と課題 | 看護学研究科教授 野地 有子 |
| 病気の管理について語ることの意義 | 看護学研究科教授 白水 真理子 |
| トピックス | |
| 大学院生の声 | 博士後期課程3年生 前川 一恵 |
| 大学院入学試験のお知らせ | |
| 2022年度博士前期課程修了時アンケート | |



姫路大学
Himeji University

ウィズ・コロナ時代の国際交流の実際と課題

看護学研究科教授 野地 有子

令和5年5月8日から、新型コロナウイルス感染症の位置づけは、これまで、「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）」から「5類感染症」になりました。大学院での国際共同研究推進や、グローバル人材育成において、ウィズ・コロナ時代の国際交流は、どのように進めることができるのでしょうか。多様性を受け入れて違いを乗り越え、ともに生み出す価値観を持った人として育て育てることは、大学院生にも看護教員にとっても大きな課題といえます。

日本看護系大学協議会国際交流推進委員会企画の Web 国際交流セミナー（2021年2月20日）では、ウィズ・コロナ時代の国際交流について、九州大学の JASSO（日本学生支援機構）助成金活用例、慶応義塾大学の夏季2週間の研究方法講義、国際医療福祉大学の留学生の課題について情報共有され、持続可能な仕組みにもっていくこと、持続可能とは、資金面と関わる人にとって魅力的であることが話し合われました。千葉大学アカデミック・リンクセミナー（2021年3月9日）では、海外連携で行うオンライン協働学習（Collaborative Online International Learning: COIL）が紹介され、カリキュラムに組み込まれた設計の必要性が示されました。日米研究インスティテュート最終シンポジウム（2021年3月12日）では、ポスト・コロナ時代の大学教育の方向性について話し合われ、目的に応じた ICT 活用のベストミックスをさぐる（対面型、ハイブリッド型、オンライン型）、ビジョンの明確化、課外活動や現地の人との交流、オンライン時の時差の問題、オンラインにより障がい者の参加や途上国もホストになれるなどの新たな展開への期待も述べられました。ウィズ・コロナ時代の国際交流では、プログラムの見直しが必要となりますが、コロナ禍の経験を活かした新たな展開ができるチャンスとも言えます。



ビクトリア大学からの表敬訪問



ビクトリア大学 Dr. Seppy と牛尾学長を囲んで



姫路大学では、カナダのビクトリア大学と学術教育に関する交流協定を結び国際連携に尽力しています。5月22日に、本学への表敬訪問がありました。大学院生や学部生を対象にした、現地での看護研修、語学研修プログラムの受講機会が用意されています。身近なチャンスをぜひ活用されてください。

<参考文献>

・看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の推進 令和2年度看護学教育 FD マザーマップ・コンテンツ開発「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流推進」コンテンツ報告書, Vol. 4, 2021, 看護学教育研究共同利用拠点, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（交際交流班：野地有子、溝部昌子、近藤麻理、小寺さやか他）

病気の管理について語ることの意義

看護学研究科教授 白水 真理子

マルチブルリスクファクターの管理やメタボリックシンドロームの概念が普及する以前、糖尿病を併せもつ虚血性心疾患患者に提供される患者教育は、虚血性心疾患に関する定型的な教育指導のみであり、専門分化された医療体制の中で、医療従事者は糖尿病の自己管理にほとんど関心がないのが実情であった。

しかし患者の病みの軌跡を紐解くと、そこには糖尿病ももった心臓病患者の姿があり、「立ち直り期」にある患者に対して、疾病併存状態に焦点を当てた自己管理教育を提供する必要性を感じた。そこで臨床の仲間呼びかけ、小さな学習会を立ち上げた。「動脈硬化が進行しやすく多肢病変が多い、無症候性心筋虚血が多く重症化しやすい、PTCA後の再狭窄率が高い」等の特徴を学んだ後、「糖尿病と私」について自由に語り合う機会を設けた。

放置や中断を含めた病気の体験を開示したり、糖尿病を軽く見ていたり、自分事として考えられなかったこと、「心臓病になった自分」に衝撃を受けていることが語られた。しかし会とその後の電話面接における患者の語りの多くは、今一度自分の自己管理を見つめ直したいというものであり、自分で掲げた課題に取り組んでいた。会では「運動療法は自分にはできない」と語っていた者が犬の散歩に取り組んだり、節酒しかできないと語っていた者が禁酒に取り組んだりという状況もあった。また、「今まで病気についてこんなふう話す機会がなかったので、ゆっくりと話ができて良かった」等の感想を語った。

中には「心臓病と糖尿病が結びつかなかった」に象徴されるような患者教育、特に初期教育の不十分さの指摘等、医療者側が反省せざるを得ない状況もあった。しかしそこには小集団学習会がもつ学び合い、思いがけない患者の療養行動の変化等、患者から気づきや力をもらおうといった、多様なパワーの交換が含まれていた。

この介入研究を通して、普段の臨床において語られるものと語られないものがあるだろうという想像も容易にできた。すなわち、現在の医療制度の中で、医師の診療や、各種看護外来、入院患者への教育やケアにおいて「生活史から病気の体験を語る」機会を意図的に、あるいは十分に設けることは難しい現状がある。また語る側に、「ためらい」があるのも事実である。加えて、患者と研究者は期間限定の出会いになるが、慢性疾患の場合、医療者とは「評価者」という要素を含んだ長い付き合いになり、それが強みにも弱みにもなる。

しかし小集団学習会の場で、看護者や同じ状況下にある仲間との相互作用を重視しながら、病いの経験を語る機会をもつことは、出来事の整理を助けるとともに、病みの軌跡の予想を現実的、かつ治療的にする効果が期待できることが分かった。医療者は自己管理の見直し、治療や治療と仕事の両立に関する意思決定等、大切な局面でこそ語りを引き出し、語りを大切に存在でありたい、また同じ境遇にある者との語らいやモデリングを活用したいと、その時から強く感じている。

参考文献

- 1) 白水真理子, 加賀谷聡子, 三浦幸枝, 佐藤征子, 大谷由香 (2004). 虚血性心疾患を合併した糖尿病患者への教育プログラムの検討. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 8 (2), 132-137.
- 2) 白水真理子, 加賀谷聡子, 藤澤 (大谷) 由香, 三浦幸枝 (2009). 虚血性心疾患を発症した糖尿病患者の病気と自己管理に関する語り. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 13 (1), 4-15.

トピックス

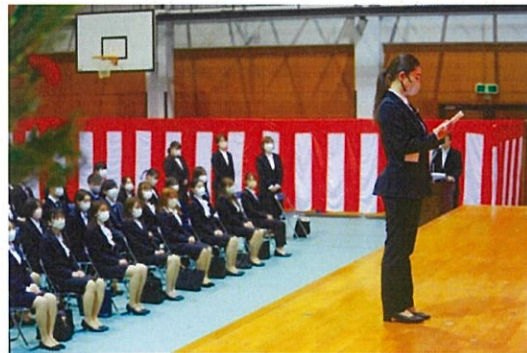
令和4年度姫路大学大学院個別授与

令和4年度姫路大学の学位授与式終了後、大学院生5名の個別授与をしました。大学院教員から修了生に向けてはなむけの言葉がおくられ、修了生から「先生がたから、さまざまな場面での声かけやご指摘によって成長することが出来ました。これからも社会に貢献できるように研鑽を積んでいきます。」という言葉がありました。



令和5年度姫路大学大学院入学式

令和5年度大学院の入学式が挙行されました。今年度は、博士前期課程4名の学生が入学し、博士前期課程の学生が入学式の宣誓をしました。「私たち看護学研究科新入生一同は、人間の存在と、生命の尊厳について深く理解し、広い視野と高い倫理観を持って精深なる学識を修め、看護の質の向上に貢献しうる創造性豊かな教育、研究力と看護実践能力を培い、看護の発展に寄与できる高度な専門職業人及び、教育、研究者を目指すことを誓います。」



博士前期課程2年次生の中間発表会を開催

5月13日(土)10時から11時30分まで看護学研究科博士前期課程中間発表会が開催しました。博士前期課程生と教員が20名程度参加し、4名の学生が発表しました。発表終了後の講評では、第1回目の発表より研究の背景が分かりやすく整理され、目的、研究方法が明確になった。全員が既に倫理委員会の承認を得ていることもおおいに評価できる。次回第3回目の発表に向けて、データ分析を頑張っ、自分の目的とした内容を明らかにしていましよう。という応援メッセージがありました。



大学院生の声

博士後期課程 3年生 前川 一恵さん

現在は千葉県にある東都大学 幕張ヒューマンケア学部 看護学科の地域・在宅看護学領域の教員として勤務する。

* 姫路大学大学院に入学しようと思ったきっかけは？

大学で在宅の教員をしながら研究をしていたのですが、共同研究者に巡り合えず、一人で研究していることが多かったです。研究は相談しながら進めるもので、一人でやるものではないという考えがありました。そこで博士課程に進学すれば、指導教員から助言がもらえると思い進学しました。

* 博士課程に進んで、何の研究がしたかったですか？

3年前は在宅で暮らす高齢者の研究をしていたので、在宅で生活を継続するためには、口から食べることが重要であることが先行研究から分かりました。口から食べることを続けるための支援である「食支援」についての研究を深めたいと思いました。

* 今の研究の状況、この3年間を振り返って。

新型コロナウイルスの影響が3年間あり、研究調査の受け入れが難しかったです。食支援に関心のある方は、研究を受けてくれました。感染渦の中インタビュー調査を、2020年に9名、2021年に25名（研究1）、2022年～2023年に12名（研究2）の合計46名の方が研究に協力してくれました。

* 研究のテーマは、入学時と比べて変わりましたか？

研究の内容はほとんど変わっていないのですが、当初の研究テーマの「摂食・嚥下機能の回復」から、「食支援」に変わりましたので、研究倫理審査委員会にテーマ変更の申し出をしました。テーマ変更の理由は、訪問看護ステーションに調査に行った際に、摂食・嚥下機能が回復した成功例が少なく、疾病や入院を機に摂食・嚥下機能が低下した方への、食べられるための支援が行われている現状を知ることができたからです。

* 博士論文に向けて、EAFONS等の学会も発表されていますか？

文献検討を姫路大学大学院看護学研究科論究に投稿し、インタビュー調査を外部雑誌にも投稿しました。学会発表は、EAFONSに2回行い、2023年9月に千葉看護学会にて演題発表予定です。

* EAFONSの内容を教えてください。

2023年の演題は、訪問看護ステーションに勤務する摂食・嚥下障害看護認定看護師が、在宅で療養している高齢者の摂食・嚥下機能の回復に向けたケアについてインタビュー調査した内容をまとめました。

* 前川さんが、在宅に興味を持ったきっかけは？

もともと訪問看護と介護支援専門員の実務は5年程度あり、その臨床経験から在宅療養支援についての必要性は分かっておりました。入院から退院後のシームレスケアについて研究の必要性を感じました。

* 今後の予定は？

研究1と研究2のインタビュー調査が終わり、これらの研究をまとめていく予定です。まとめる際に、臨床現場と解離していないかどうかの確認のために、在宅の実務経験者による専門家会議を予定しています。研究成果が現場に活用されてこそその研究だと思うので、実務経験者の方々のご意見を頂き、それを博士論文としてまとめていきたいです。

Difficulties Multidisciplinary Medical Personnel Experience in Treating Older People with Dysphagia.

Kazue Maekawa ¹⁾²⁾, Iujono fumiyo ¹⁾, Satiko Takahashi ¹⁾

1) Graduate School of Nursing Science Himeji University

2) Department of Nursing, Kanagawa Dental University Junior College



Objectives

As people get older, their physical functions decrease. In particular, they often suffer from dysphagia or difficulties with swallowing, which leads to undernutrition and aspiration pneumonia. Consultation clinics staffed with multidisciplinary medical personnel are available for older people with dysphagia. This study aimed to identify the difficulties multidisciplinary medical personnel experience when treating older people with dysphagia.

Methods

Nine multidisciplinary medical professionals participated in the study. All worked at different hospitals that provide rehabilitation services to older people with dysphagia in the western part of Japan. Semi-structured interviews were conducted with the participants between November 2020 and December 2020, and the data were analyzed using qualitative content analysis.

Results

The seven categories created and ninety-six codes were extracted from the interview data.

Participants				
	Age	Gender	Occupation	Years of clinical experience
A	30s	men	dentists	12years
B	20s	women	dentists	4years
C	30s	women	dental hygienists	15years
D	40s	men	medical doctors	25years
E	50s	women	CNAs	28years
F	40s	women	RNs	18years
G	40s	men	speech therapists	19years
H	30s	women	nutritionists	17years
I	40s	women	nutritionists	22years

Category1 "dysphagia caused by physical functions"	
Subcategory (7)	Number of codes (29)
Oral care is difficult	6
General condition affects	5
Disease syndrome	5
Adverse effects of drugs	1
Undernutrition	1
Lack of energy requirements	3
Cognitive decline	2

Category2 "difficulties with deciding future direction"	
Subcategory (5)	Number of codes (21)
Family cannot follow the prescribed diet	7
Refuse to insert gastrostomy tube	5
The patient does not wish to ingestion	3
Need to hold a conference	3
Make a self-judgment	3

Category3 "high risk of aspiration"	
Subcategory (3)	Number of codes (13)
Difficult to assist with meals	8
Repeat pneumonia	3
Risk of aspiration at the time of examination	2

Category4 "physical function declined due to COVID-19"	
Subcategory (2)	Number of codes (10)
Activity decreased because of stay home to prevent COVID-19 infection	6
The condition of residents declined due to the prohibition of family visits at the facility	4

Category5 "not having appropriate swallowing assessment"	
Subcategory (2)	Number of codes (9)
Not receiving swallowing evaluation at the right time	6
Appropriate evaluation cannot be made unless specialist	3

Category6 "lack of medical resources in the community"	
Subcategory (2)	Number of codes (9)
Manpower varies depending on the facility	7
Lack of professionals in the regional	2

Category7 "varieties of caring power and economic power"	
Subcategory (2)	Number of codes (5)
varieties of caring power	3
varieties of economic power	2

Conclusions

Treating older people with swallowing difficulties and oral ingestion problems is not easy because it is necessary to understand them holistically, including their physical/systemic functions, their activity levels, what the patient and the family want, caring power, and economic power. Older people with dysphagia tend to have difficulties making decisions about their future. When caring for these people, it is necessary for multidisciplinary medical personnel to share information.

Care by Certified Nurses in Dysphagia Nursing who Worked at a Visiting Nursing Station: Improving Older People's Swallowing Function



Kazue Maekawa, Fumiyo Fujino, Sachiko Takahashi
Graduate School of Nursing Science, Himeji University, Japan

Objectives

Older people with impaired swallowing function are at risk for low nutrition and aspirapneumonia and require nursing care. This study aimed to clarify the care Certified Nurses (CNs) in Dysphagia Nursing, who worked at a visiting nursing station, provided older people to improve their swallowing function.

Methods

Interview surveys were conducted with five CNs in Dysphagia Nursing who worked at a visiting nursing station in the Kanto region of Japan from February to June 2022. Data were analyzed using qualitative content analysis. All the participants were aged between 30's to 40's and had 11-22 years of clinical experience. This study was conducted with the approval of the Ethics Committee of Himeji University (2021-GN03). Declaration of Interest: none.

Results

From the interview data, 57 codes were found and grouped into 13 subcategories. As a result, five categories were extracted.

Participants

Table 1. Attributes of research subjects

	Age	Gender	Clinical experience
A	40s	Female	22 years
B	40s	Female	21 years
C	30s	Female	11 years
D	40s	Female	22 years
E	30s	Male	11 years

Table 2. Category 1
"Had the older people perform exercises that used the specific knowledge and skills of the CNs"

Subcategory	Code
Practice swallowing	4
Follow the National Dysphagia Diet created by the Academy of Nutrition and Dietetics	3
Teach how to eat without choking	2

Table 3. Category 2
"Had the older people strengthen their muscles and modify their eating posture to prevent aspiration"

Subcategory	Code
Increase in overall muscle strength by promoting activities of daily living	4
Adjust posture to avoid choking while eating	5

Table 4. Category 3
"Taught daily self-care to the older people"

Subcategory	Code
Promote oral self-care	4
Exercise to promote salivation and tongue movement	4
Introduce swallowing exercises that older people can usually do	7

Table 5. Category 4
"Had a reassuring attitude"

Subcategory	Code
Practice chewing with pleasure	7
Encourage and guide without coercion	4

Table 6. Category 5
"Based on their abilities, informed the family members regarding the care necessary to restore the swallowing function"

Subcategory	Code
Inform them about different diets and assistance methods for different patients	3
Ask for care that does not burden the family	4
Talk about not forcing care	6

Conclusions

Regarding the question on dietary pattern, the respondents answered that their dietary pattern improved after the instruction. It was confirmed that daily training was necessary to restore older people's swallowing function. Therefore, it is advisable that CNs should provide instruction on oral care and swallowing training for older adults with dysphagia and their families. In this study, care was taken not to overstrain older people and their families when CNs gave instruction.

Due to legal restrictions on home care services, the CNs can only visit once or twice a week. Within this constraint, they should use their limited time to do their best to provide the most ideal care and guidance to older people and their families.

大学院入学試験のお知らせ

博士前期課程では、人間に対する深い洞察力と高い倫理観をもち看護の理論と科学的な根拠に基づき、人々の生活や看護の場において教育力、指導力、研究能力を発揮できるすぐれた看護実践専門職業人を育成しております。また、博士後期課程では、人間に関する高い学識をもち人々の健康と生活の質の向上を目指した支援を体系的・科学的に探究し、独創性のある研究を自立して行うことができる教育・研究者の育成を目指しています。

下記の日程で博士前期課程・博士後期課程の入学試験を実施しますので、姫路大学大学院入学センター（TEL:079-247-7306 E-Mail:nyushi@koutoku.ac.jp）までお問合せください。随時個別相談を受け付けております。

働きながら学びやすいようにほとんどの講義はインターネットを利用して自宅や職場で受講することができます。また、長期履修制度もあり多くの大学院生が利用しています。

* 出願資格認定審査

- I 期 2023 年 8 月 1 日（火）～ 2023 年 8 月 16 日（水）
- II 期 2023 年 11 月 21 日（火）～ 2023 年 12 月 6 日（水）
- III 期 2023 年 12 月 7 日（木）～ 2024 年 1 月 18 日（木）

* 出願期間

- I 期 2023 年 8 月 17 日（木）～ 2023 年 9 月 7 日（木）
- II 期 2023 年 12 月 7 日（木）～ 2024 年 1 月 18 日（木）
- III 期 2024 年 1 月 9 日（火）～ 2024 年 1 月 31 日（水）

* 試験日

- I 期 2023 年 9 月 9 日（土）
- II 期 2024 年 1 月 28 日（日）
- III 期 2024 年 2 月 10 日（土）

* 会 場：姫路大学（兵庫県姫路市大塩町 2042 番 2）

* 試験科目

博士前期課程

- 社会人選抜入学試験 小論文、面接
- 一般選抜入学試験 英語、看護専門科目、面接

博士後期課程

- 一般選抜入学試験 小論文、英語、面接

2022年度博士前期課程修了時アンケート

1 大学院の講義はあなたにとって有益でしたか？
3件の回答



- *あらためて本質を学べた。専門的な講師の話は、視座が広がり、とても楽しかった。ディスカッションもとても興味深く楽しかった。
 - *すべての科目において、新たな知識を学ぶ事ができた事、また、看護研究の方法や統計について学ぶ機会を得て有益だった。
-

2 遠隔授業はあなたにとって効果的でしたか？
3件の回答



- *遅い時間から移動なく授業を受けられたこと
 - *時間管理ができて仕事との両立ができた。クラスルームは、他の人のレポートも事前に読むことができた。ディスカッションも良かった。
 - *仕事をしながらの学修において、遠隔授業を受けられる事のメリットは大変大きかった。
-

3 大学院の講義や目標はシラバスどおりでしたか？
3件の回答



4 大学院の講義の日程調整や時間調整は適切に行われていましたか？
3件の回答



* 日程、時間の調整をしていただき感謝です。ほぼ、遅刻なく出席できた。

5 あなたは、この大学院の講義を受講して満足していますか？
3件の回答



* レポートの課題を理解することが難しかったが、自身の考えで伝えることの面白さも感じた。

6 あなたはこの大学院に来て自分の能力が向上したと思いますか？
3件の回答

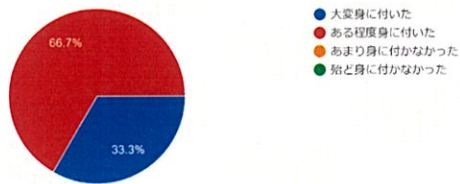


* 講師の意見はもちろんだが、同期のみんなとの意見交換、ディスカッションは、興味深かった。

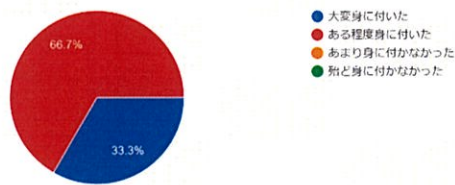
7 あなたは大学院での取り組みについて意欲的、主体的でしたか？
3件の回答



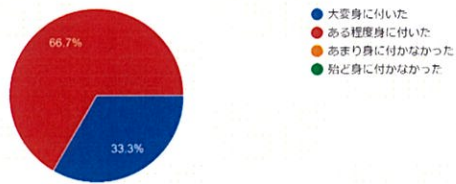
8 ディプロマポリシー 人々の健康課題について...に関する基礎的能力を身に付けたと思いますか？
3件の回答



9 ディプロマポリシー 人間に対する深い洞察力和...増進に寄与する能力を身に付けたと思いますか？
3件の回答



10 ディプロマポリシー あらゆる健康レベルにある...看護実践ができる能力身に付けたと思いますか？
3件の回答



編集後記

姫路大学大学院看護学研究科のほとんどの講義は、インターネットを利用して自宅や職場で受講できるようにしております。また、平日の夜間や土曜日などに開講しており、日程は教員と相談のうえ決めることができます。1年で数回開催している研究の中間発表会では、対面、オンラインを併用して実施しています。

さて、新型コロナウイルス感染症の位置づけが、5月8日より季節性インフルエンザと同じ「5類感染症」に変更されました。なお、兵庫県のワクチンの接種状況、全人口に占める割合は(6/25現在)、1回目(4,342,823人)79.1%、2回目(4,298,122人)78.3%、3回目(3,621,520人)66.0%、4回目(2,387,667人)43.5%、5回目(1,345,945人)24.5%、6回目(597,346人)10.9%となっております。これからの感染対策は、個人や企業の自主判断となります。

大学院ではNewsletterを引き続き発行し、教育・研究者や地域の人々に大学院を身近に感じていただきたいと考えております。次号は2024年2月頃にお届けできる予定です。

大学院 HP



Instagram



姫路大学大学院看護学研究科 Newsletter

2023年7月10日発行

■編集・発行

姫路大学大学院看護学研究科

〒671-0101 兵庫県姫路市大塩町2042番2

TEL : 079-247-7301

E-mail: daigakuin@koutoku.ac.jp



 **姫路大学**
Himeji University